病院図書室　12(3):79,1991・1992

第9回 図書館情報サービス研究大会 参加報告

名古屋赤十字病院　大平　美里

去る5/31－6/1、京都市において図書館情報サービス研究大会が開催された。今回の大会では医科系の図書館ばかりでなく、総合大学図書館、公共図書館、学校図書館等の参加が多数あり、内容の多様化が図られていた。病院図書室担当者も24名参加し、親睦を深めると共に情報交換も活発に行われていた。演題数も多く、2会場を使用しての発表となっていたが、病院図書室による演題は7題であった。

昨年12月に発行された「病院機能標準化マニュアル」に関する演題が2題あり、病院図書室が機能の基準化を必要としており、わずかでも前進している事がうかがえた。篠原氏（川崎市立川崎病院）はマニュアルが作成されるまでの過程を、大橋氏（社会保険中京病院）は実際にマニュアルを使用し自室の機能評価を行っていた。図書委員会でマニュアルを検討し、医師を対象に行ったアンケートから得られた客観的なデータを基にした評価は具体的で明確であった。主観的な評価にとどまらず、マニュアルの有効的な活用を見いだすことができるものであった。

また、ネットワークに関する演題も2題あった。徳田氏（大阪府立母子保健総合医療センター）は、相互貸借業務の環境作りという点から、小児医療専門機関の相互協力の必要性を述べていた。飯田氏（浜松赤十字病院）は、医大担当者を含む病院図書室担当者の自主研修が、2ケ月に1度、4年間継続している過程の発表を行った。常時7～8人の参加があり、地域的にも発展している現状と努力は、大学図書館担当者にも高く評価されていた。

その他にも、岡橋氏（社会保険広島市民病院）は、新しい病院図書室サービスを「この図書室に立ち寄れば、あらゆるサービスを受けることが可能である」という言葉で総括していた。野原氏（済生会下関総合病院）はOA機器の紹介を、千住氏（日生病院）は、スペース、コストに縛られる病院図書室の立場からのCD－ROM導入の経験の発表を行った。

継続教育では、山口氏（浜松医科大学）の「CD－ROMによるエンドユーザーサーチングのための戦略」は、病院図書室でも充分に活用できる大変興味深いものであった。エンドユーザーサーチングの登場により、図書館員の役割は代行検索から検索法の指導へ変化した。利用者のinformation literacyを高めると共に、担当者自身も情報を取り扱う能力を向上させていくことは、1人で何役もこなす病院図書室担当者にとって困難なことであるが大きな目標にもなると考えられた。

以上、病院図書室関連の演題をいくつか報告した。他の分野の図書館員と交流することは、ともすれば視野が狭くなりがちな病院図書室担当者にとって大きな刺激になることは間違いない。本大会に参加することは、各自の資質向上を図ることは無論、新鮮な外の空気を吸うためにも従来の研修会とはまた違った意義があると思われる。

医への想いしなやかに

小笠原　望　著
医学書院　1992
¥1,648（税込）

日常の診療を通しての患者さんへの想い、医への想いをつづったエッセイ集。